

資源の循環利用をどのように進めていますか？

投入する資源の量から削減するリデュース、できるだけ廃棄物とならないように長く使い続けるリユース、再資源化して使うリサイクルという、より上流からの対応によって、循環型社会構築への取り組みを進めています。

資源循環への取り組み

廃棄物リサイクルの状況

鉄道事業からは、列車や駅からの一般廃棄物や総合車両センターからの産業廃棄物、生活サービス事業からは、飲食業の生ゴミや小売業の一般廃棄物など、さまざまな廃棄物が排出されます。

JR東日本グループが2005年度に排出した廃棄物は77万トン。このうち79%をリユース・リサイクルしました。廃棄物量は、排出割合が大きい設備工事の内容が年度ごとに異なり、変動が大きいため、リサイクル率については廃棄物の種類ごとに達成目標を定めて取り組んでいます。なお、一般廃棄物は、JR東日本グループ全体で2008年度までにリサイクル率を43%とする目標を定めており、2005年度は42%となりました。

駅・列車におけるリサイクル

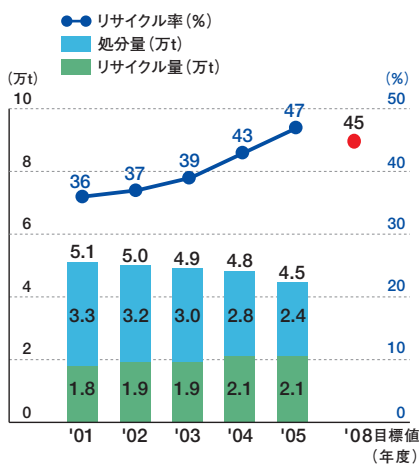
JR東日本を利用するお客さまは一日平均約1,600万人。駅や列車で排出されるゴミは2005年度で4.5万トンにも及びます。これは11万人が1年間に一般家庭で出すゴミの量に相当します。しかし、このなかには新聞や雑誌、空き缶などの資源ゴミも含まれているため、分別を徹底しリサイクルすることが大切です。JR東日本では、駅に分別ゴミ箱を設置するほか、収集後の分別を徹底するためにリサイクルセンターを設けています。2008年度までにリサイクル率45%の達成を目標としていますが、2005年度

は47%となり、目標を達成しました。

リサイクルセンターの運営

駅・列車からの廃棄物が特に多い首都圏では、リサイクルセンターを設置して対応しています。(株)東日本環境アクセスが運営している施設で、上野駅と大宮、新木場の3カ所にあります。上野駅と大宮のリサイクルセンターでは2005年度、東京都内と埼玉県内から空き缶・ビン・ペットボトル4,257トン进行分別・圧縮し、再生業者に送りました。新木場のリサイクルセンターでは2005年度、集積した新聞・雑誌4,937トンを製紙工場へ送り、コピー用紙などにリサイクルしました。

▶ 駅・列車のゴミの推移

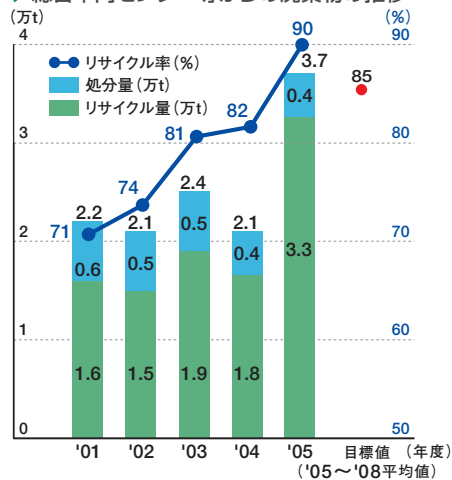


新木場にあるリサイクルセンターでは新聞・雑誌を処理しています

▶ 総合車両センター等でのリサイクル

JR東日本では、新津車両製作所で通勤・近郊型電車を製造し、そのほか総合車両センターなどで車両の整備や修繕を行っています。廃棄物の減量とリサイクルを進めるため、車両設計時からライフサイクル全体を考えた対応をしているほか、各総合車両センターでは、廃棄物を20～30種類に分別し、専門の回収業者に送るなど、分別の徹底によりリサイクル率の向上に取り組んでいます。なお、2005年度の実績から把握の対象を拡大し、廃車解体のうち外部に売却したうえで解体される車両についても、把握の対象として取り組みを進めることとしました。

▶ 総合車両センター等からの廃棄物の推移

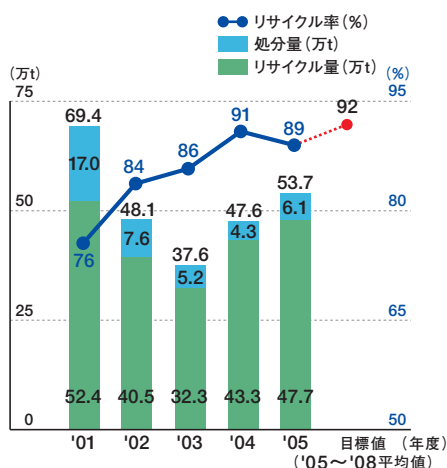


新津車両製作所。1999年に日本の鉄道会社の現業部門として初めてISO14001の認証を取得

設備工事における廃棄物削減

駅や構造物における設備工事では、受託工事^{※1}による12万トンを含めて、2005年度には53.7万トンの廃棄物が発生しました。廃棄物処理法上は工事の請負会社が排出事業者になりますが、JR東日本も発注者として、仕様書などを通じて、建設副産物の適正処理や、廃棄物を抑制する設計・工法を規定し、廃棄物削減に向けた努力をしています。

▶ 設備工事からの廃棄物の推移

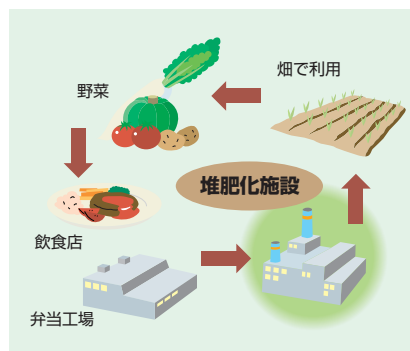


生活サービスにおける取り組み

JR東日本グループでは、駅構内・駅ビル等から出るゴミの減量やリサイクルを推進しています。

駅弁などを製造・販売している(株)日本レストランエンタプライズでは、「食品ゴミ循環の仕組み」を構築しています。これは、食品ゴミを堆肥へ再生し、自社の有機リサイクル農園や契約農家で使用、さらにそこで生産した無農薬・無化学肥料野菜を飲食店等で食材として使用するというものです。

▶ 食品ゴミ循環の仕組み



ほかにも、(株)吉祥寺ロンロンでは、駅ビル内に堆肥化施設を設置したり、グランデュオ立川では、ビル内でつくった堆肥を店頭で販売しています。

オフィスにおける取り組み

オフィスでは、さまざまな対策によりペーパーレス化を推進するとともに、廃棄物のリサイクルに取り組んでいます。分別を徹底することで、2005年度には廃棄物2,912トンのうち1,847トン(63%)をリサイクルしました。

水資源の有効利用

JR東日本では年間1,128万トンの水資源を使用しているため、中水^{※2}の利用を積極的に進めており、雨水や手洗い水をトイレの洗浄水として再利用しています。本社ビルでは2005年度に使用した4.2万トンの水のうち、2万トンを利用しました。

JR東日本総合研修センターにおけるリサイクルの取り組み

JR東日本総合研修センターでは、地域との共生をめざし、食堂で発生する生ゴミを堆肥化して、地元農家に提供するリサイクルを行っています。

食事を提供している(株)日本レストランエンタプライズでは、食材の無駄をなくするための献立と仕入れの工夫を行っています。また、ゴミ処理装置の維持管理を行っているジェイアール東日本ビルテック(株)新白河事業センターでは、装置の故障低減や

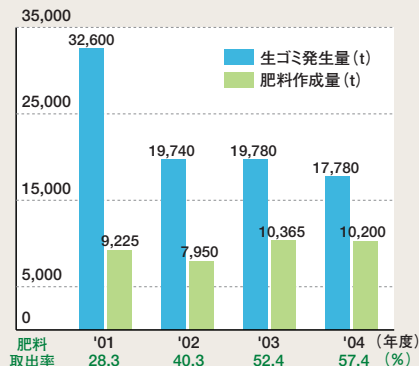
運用管理方法の改善を通じて、肥料取出率を年々高めています。

こうしてつくられた肥料は、高い品質で地元農家の方々にも評価いただいています。



できあがった肥料

▶ 生ゴミ発生量と肥料作成量



※1 受託工事

列車の安全運行の確保などのために、JR東日本が自治体などから委託を受けて行う社外施設の工事。

※2 中水

上水と下水の中間に位置付けられる水の用途。水をリサイクルして限定した用途に利用するもの。

乗車券類の廃棄物削減

JR東日本では、切符や磁気定期券のリサイクルに取り組むとともに、繰り返し使用できるICカード乗車券Suicaの普及を推進し、乗車券類の廃棄物削減に取り組んでいます。

回収した切符については、製紙工場へ送り、切符の裏面の鉄粉を分離して、2005年度には666トンの全てを、トイレトーパーや段ボール、名刺用紙にリサイクルしました。また使用済み磁気定期券については、回収した全てを固形燃料として再利用しています。

また、Suicaは繰り返し使用できることから、普及が進むほど、資源を節減することにつながります。このことから、使い捨てを防止するため、通常の乗車券類とは異なり、初回購入時にデポジットをお預かりしています。

Suicaの普及により、磁気定期券の減少も進んでいます。具体的には、Suica導入前の2000年度と2005年度の磁

気定期券の年間発行枚数を比較すると、約1,620万枚減少しました。

グリーン調達

1999年に定めた「グリーン調達ガイドライン」に基づき、資材調達の際に環境負荷が小さい製品を選ぶよう努めると同時に、再生材料の使用や廃棄物の減量化などを取引先さまに依頼しています。

2000年度からペットボトルなどの再生ポリエステル繊維を利用した制服を採用しています。また、オフィスで使用する事務用品においては、44%の品目がグリーン購入対象物品となっており、コピー用紙も全社使用量の99%が再生紙で占められています。

さらに、JR東日本の資材調達先となる取引先さまについて、環境およびCSRの取り組み状況を把握し、調達先選定の際の指標のひとつとしています。



駅で回収した新聞紙は製紙場で再生紙に生まれ変わります



JR東日本のコピー用紙として購入し、社内で再び使用します

駅で発生するゴミの循環利用

駅で発生するゴミを単にリサイクルするだけでなく、再び当社で活用することにより、循環の環の拡大に努めています。切符から再生された紙は、トイレトーパーとして当社の首都圏の主な駅のトイレで使用するほか、社員の名刺としても使用しています。分別ゴミ箱で回収した新聞紙はコピー用紙にリサイクルし、当社のコピー用紙として使用しています。また、雑誌はコート紙にリサイクルし、新幹線車内に設置している情報誌『トランヴェール』の用紙として使用しています。



駅で集められる使用済み切符は、トイレトーパーとして首都圏の主要駅に戻ります



ガラス瓶をリサイクルしたタイルを、フィットネスクラブのプールサイドで使用(ジェクスー上野店)

磁気定期券の発行枚数の推移

